

転生して氷の滅悪魔導士をしています

ヒーくん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ひよんな事から転生しちゃって、育て親なシルバーから教わった滅悪魔法と暴食とかいう魔法覚えたからとりあえず好き勝手に生きよう。そんなお話。手始めに、ジャツカルをおちよくろうかな。

## 目次

#.	#.	#.
3	2	1
過去と未来と希望	怒りの冥王	ジャツカル髪の毛チリチリになる (内容変更)
9	5	1

## #. 1 ジャツカル髪の毛チリチリになる（内容変更）

1

——魔法。それはこの世界では一般的な事象。魔力を発動の条件として、それは人により魔法のあり方を変える。

それは、人により七変化する。

四大属性に称される地水火風、またこれも術者の使い方により性質を変える。これを踏まえて魔法という物は、人という個性色に染まりその姿を変えるのではないか。昔にいた魔導士はそう考えているわけである。

「……あーっ、くそ。やっぱり本読むのはかつたるいな」

ボヤク。コキコキつと首の骨を鳴らし、深呼吸を一つ。湿気とカビの匂いが鼻腔をくすぐる、まあ何十年も前からあるギルドの地下室なんてこんなもんなんだろう。

イスから立ち上がり伸びをして、さっきまで読んでいた本を閉じて宙に置く。すると、意識を持った生物のように浮遊していき指定されている本棚へと入り込んだ。

魔法が普通なこの世界では、こうしてありとあらゆる場面に置いて魔法という物がよく目立つ。

自分の頭の上に手のひらを乗せて上下し、まだ前世の時の身長には追いつかないなあと思う。

「しかし、この世界に来て早くも十年、か」

どうしてこの世界に来たんだろう、だとか何で死んだのか——なんてもうそんな物は考え過ぎて飽きてしまった。精神年齢が前世の記憶を引き継ぎ、やや身体年齢に引きずられ十代後半と考えてもあまりにも多くを考えれる時間だ。幾度こんな事を考えてきたなんかも数え切れない。

鬱屈しそうになる臭いに重々しい雰囲気は、やはりどうも嫌だ。ハアとため息をこぼす。

マッドなサイエンティストだったらこんな空気が好きなのかもわからないが、実際オレはただの人間である。特殊な魔法が使えるが。

特殊な育て親がいるが。

地下室と一階へと繋がる階段の前にある芸術的価値がムンムンと漂う鏡の前に立ち、一階に上がる前に身だしなみを整える。しかし、前世の記憶なんかすでに曖昧な為以前の自分の姿なんか記憶にないが――

「しっかし美形だよな」

鏡に映るオレの姿はまるで、本から飛び出してきた主人公の如く眉目秀麗である。

端正な顔立ちに、黒髪。鼻まで届く前髪に、首筋付近まで伸びた襟足。黒髪に対比する様に、鮮やかで自分で言うのもなんだが引き込まれる様な、それでいてガラス玉の様に透き通った黄金色の瞳。

顔の右半分には黒い紋様が走っている。服を脱げば、右半身なのが。中二臭くて嫌だが、美形なので映えているからマシである。

まるで漆黒の修道服を改造したかの様な服。特に乱れている所もない為、適当に髪の毛や体のあちこちについた埃を手で払う。

「よしっ……ジャツカルでもおちよくつてくるか」

2

2

「待たんかいクソガキイイっつ!!」

「待てって言って待つ奴がどこにいるんだバーカっ!!」

ただいま絶賛鬼ごっこ中である。捕まれば最後、後ろから猛ダツシュしてくる顔面に油性マジック（オレが犯人）でラクガキされた狐男ことジャツカルに爆発されてお終いだ。

その証拠に毎度毎度の事ではあるが、庭の至る所が轟音を上げて爆発している。

「逃げ足だけは相変わらず一丁前やのう！ 早う捕まらんかい!!」

「捕まったら爆発しちゃうのに!! アホじゃねえの狐男、ぷふう！」

「おまつ、自分で書いたラクガキの癖して笑うなや！ 絶対血祭りにあげたるからなあ!!」

ドゴオンツと地面が爆発した。と、言うのも勿論ジャツカルの仕業

である。足元の地面を爆発させ、加速したのだ。一步踏みしめる度にドカンドカんだ、環境破壊もいところである。ああ、今日も今日とて庭園の守護神の冥王（笑）マルド・ギールの制裁が見れるのか、楽しみだ。

「わーはっはっは！ ジャツカルまたマルド・ギールに怒られるぞー！」「やかましいわ！ おどれが全部事の発端やないか！ 一回——」  
「キュインっ。ジャツカルの右手がオレへと向けられる。それは、オレ以外のこのギルドの連中が使える魔法の上位——呪法の発動。やっべ、今日はいつもより当社比二割り増しの勢いで怒ってらっしやる。」

額から流れ落ちる冷や汗。いつもはなんだかんだで爆発させてこない癖して、オレがせつかく書いてあげた<sup>ラクガキ</sup>芸術がよっほど気に食わないとは、美への関心が薄いと思う。

「なんて、考えてる場合じゃなかつ——」

「——爆発しとかんかいワレエ!!」

空気が連鎖的に爆発し、目の前が閃光と爆炎で飲み込まれていく。視界がみるみる内に赤で埋め尽くされていく。

「なんやあ、アツサリやな」

イインと耳鳴りがする中で、ジャツカルの声が響いてくる。

しかし今日は酷く荒れている。誰だジャツカルを怒らしたヤツは。全く。ジャツカルは、感情が態度、言動だけじゃなくて炎にまで出るというのに。何十回とジャツカルをおちよくったか判らないオレが言うのだ、間違いない。

「——……オレじゃなかつた即お陀仏だよこんちくしょう。お、レインよ。こんな所で死ぬとは情けない状態になっちまうよ」  
視界が晴れる。

「ワケわからん事ばっか抜かしよって……ホンマ困ったモンやで。こがなけつたいな魔法覚えるなんて」

頭を掻きながら嘆息するジャツカルを余所目に、爆炎を頬張る。

荒々しくてまるで蹂躪される様な味。それがジャツカルの炎の味。一頻り辺りに散った炎を食らい尽くし、全身から魔力を迸らせる。

これこそがオレの、身につけた魔法。

「あ？ オイオイ待てや！ そがな高魔力のモン食らったら流石のオレでも無傷やすまへんで!？」

「やられたらやり返す——倍返しだ」

ギヤアギヤア喚くジャツカルに適当に返し、腹の底から膨れ上がる魔力が全て炎へと変える。さながら先ほどの爆炎が逆流する様な錯覚がある。まあ、確かにいつもだとオレの攻撃受けてもピンピンしてるジャツカルでも自分の攻撃上乘せされたら傷の一つ二つつくだろう。

へっ、いつもオレの髪の毛をアフロみたいにチリチリにしてるから今日こそやり返してやる。そんなもって、この事でこれからネタにしておちよくってやる。

「とりあえず、髪の毛チリチリになっとけ爆発狐ええええ!!」

口から思い切り真紅の炎を吐き出す。真っ直ぐに突き進む炎はたちまちジャツカルを包み込む。

「んぎやああああ!!？」

ザマア見やがれ狐め。お見事髪の毛がチリチリのボンバーヘッドである。とりあえず懐からカメラを取り出し、ボロボロになったジャツカルを写真に納める。現像してそこらへんに張り回ってやろう。カメラが壊されたらたまらないから、自室にも隠しておこう。

「仕返し大成功っ、魔法様々だなあ」

本日も晴天なり。空へと拳を突き上げて大きく伸びを一つ。今日もぐつつすと眠れそうだ。

オレはレイン・ドロップ。この世界、アースランドに来て十歳になる。

様々な属性を摂取する事で、その力を飛躍的に向上させる暴食グラトニーという魔法と、滅魔スレイヤー導系魔法。

元人間の悪魔、シルバーから教わって身につけた魔法——悪魔を討つ氷の滅悪デビルスレイヤー導士だ。

## #. 2 怒りの冥王

1

「マルド・ギールは久しく忘れていた感情を思い出した」

藍色の髪を縛った一人の美青年——マルド・ギールは打ち震えていた。片手に抱いた『END』と描かれた古びた本をそつと、地面に置く。

こんな事があつていいものであろうか、いやない。マルド・ギールは今までどれだけの時間と力を費やした事か、そんな物考えてもキリがない。幾度、この様な事があつたのだ。

わなわなと唇を噛み締める、つうつと血が流れた。その細目がギンツと見開かれた。

この感情は嫌いだ、人間に近くなってしまう。だから、忘れてしまわなければならぬ。

「——それは、怒りだ」

グバアつと魔力の奔流が起きた。ただそれだけで風が突風へと変わりバサバサと髪が揺れる。

マルド・ギールが歩みを始める。周りを見渡せばありとあらゆる大地が陥没し、挙句の果てには焼き焦げている。

「この呪法の残留は——ジャツカルか、ふんつ。幾度マルド・ギールに逆らえば済むというのだ」

心から叫びたい。

「この庭はっ！ このっ！ マルド・ギールが丹精込めてっ！ 呪法さえも使わず作り上げたというのにつ!!」

憤慨だ。あの悪魔め、滅悪せねばならない。

「なに、体なぞヘルズ・コアでまた作ればいい」

まず先にこの庭を直さなくては、焼け落ちた花びらを手に取り呪法を唱える。

「——ふんつ。このマルド・ギールが怒りを思い出す事になるとは」  
たちまち庭園は元の姿に修復された。

ああ、これこそが庭園の姿だ。マルド・ギールは思う。この可憐さ



と綺麗さを兼ねそろえた芸術的な庭園に思いを寄せて怒りを忘却しよ——

「だああああっ!! 何やあの写真はあああ!! あんのクソガキいい、思う存分に爆発させたるわああ!!」

ドゴオオオオンっ!! マルド・ギールの目の前の庭園が爆発した。爆発に呼応する様に周囲の草木も爆ぜる。

声ができる方に振り返る。そこには、耳をピンッと尖らせたジャツカルが青筋を浮かべて辺りをドカンドカンと爆発させていた。

「ふんっ——ジャツカル、貴様」

「あ? なんやねんな、こっちは忙しい言うのにやな」

マルド・ギールが打ち震える。ジャツカルは小首を傾げる。

駄目だ、この狐は、顔だけじゃなくて脳みそまで狐らしい。

マルド・ギールは眠りにつこうとしていた感情を呼び覚ます。

「貴様は——このマルド・ギールから怒りという感情を思い出させたい!!」

「はっ?! ま、待ってや! これには、深い訳っちゅうヤツがやな!」

「まだ未完成だが、これを先に貴様にくれてやろう」

ゼレフ書の悪魔が持つもう一つの姿、エーテリアスフォームへとマルド・ギールは変わる。

未完成だが、それでもジャツカル一人滅するには容易い。

「堕ちよ煉獄へ——メメント・モリっ!!」

「んぎやああああああああ!!」

その日、冥府<sup>タルタロス</sup>の門のヘルズ・コアにジャツカルの姿が確認された。

2

「——うひゃひゃひゃっ!! ジャツカルのあの顔っ、マルド・ギールの怒り何度目っ。二日に一回は怒ってる」

絶賛大爆笑中。ヘルズ・コアを覗きに行くとジャツカルが收容された。てた。

ラミーがフアフアフア笑ってたから、一発ぶん殴った。マルド・

ギールがぶんすかして、本に頼りすぎた。キョウカがそれ見て悶えてた。

「今日も平和だ、皆人間じゃなくて悪魔だけだ。」

人間なんてオレしかないけど。別に寂しくはない、シルバーにマルド・ギールにジャツカルもいるから。何かとこの三人は大好きだ。育て親だし、面白いから。

「あ、後キョウカも少し。マルド・ギールの寝室にお邪魔して寝顔を撮ったヤツを見せたらお金くれたから。」

「あーあ……シルバー早く帰って来ねえかなあ」

「この世界で初めて会って育ててくれた元人間な悪魔。言葉や常識、魔法を教えてくださいオレの親みたいな存在。」

「たまに、今みたいにとっさにフラリと出て行ってフラリと帰ってくる。だけど、帰ってくる度に色々な事を教えてくれるし、魔法の訓練もしてくれる。」

「腹減ったし……暴食グラトニーって何だよマジで。フードファイター顔負けの胃袋持つてるわ」

「暴食グラトニー。皆には覚えたと言っているが、どういうワケか転生したその時から身についていた魔法。物心ついた時にオレの記憶が出てきたワケだけど。物心つくまえの記憶なんてんで知らん。ちなみに体の紋様はその時からついてた。」

「全属性を食べる事が出来て、その食べた属性を吐き出したり体に纏う事が出来る。まあ、単純に吐き出さなければかわされたりするけど。」

「そして、氷の滅悪魔法。」

「育ての親であるシルバーから教わった氷の滅悪魔法。でも、マルド・ギール達の前では使うなどいわれている。何故かは知らないけど。」

「シルバーと修行する時は、どこか少し遠いところへ行ってからする。まあ、外の世界ってのも楽しいから特に不満はないんだけどねえ。」

「腹減ったー」

「手から滅悪魔法で、氷を生み出し自分の口の中に放り込む。」

「お、え」

すぐに吐く。

なんでかわからないが、自分で作った氷は食えない。シルバーのは食べれるの不思議である。

前一度シルバーに聞いた時に言われた言葉は、

『お前は自分がした排泄物を食いたいと思うか？』

何ともいえない気分である。腹が減るとつい、氷を生み出して口の中に突っ込む癖をやめなければ。

そう考えてはいるが、どうも駄目である。早く治したいなあ。

「早くシルバー帰って来ねえかなあ」

まだまだ沢山聞きたい事とか教えて欲しい事があるというのに。じたばたじたばた。

……むなしくなってきた、暴れたら更に腹が減った。

「とりあえず、何か食べようかなあ」

そう考えて自室を飛び出した。

### #. 3 過去と未来と希望

1

「いやはや、コヤツの命はおいくらか？ おいくらか？」

「ゲヘヘヘヘ——、単眼の刺々しい容貌をした悪魔——フランマルスは嗤う。

眼前にあるのは、再生機関ヘルズ・コアの培養液に包まれた一人の男性。黒い短髪の顔に傷があり、体自体の傷は深刻ではあるが肉体の損傷はない。

「しかしこの人間の魔力は相当お高いですねえ」

「ふんっ、我がデリオラが暴れた箇所へと赴き見つけ出したのだ。当然であろう」

フランマルスは液晶画面に映し出された魔力数値に驚愕を浮かべる。

それに呼応する様に、黒衣を身に纏うまるで亡霊の様な雰囲気すら醸し出す髑髏の悪魔——キースは答え、フランマルスと共にくつくつと笑みを浮かべる。

ゴボゴボゴププ……男性の口から酸素が漏れる。

微かに瞼が動き、目が開く。

「ふむ、回復が中々に高いですな。魔力の質の良さ——と、言うべきですか」

ポチツとな。フランマルスがヘルズ・コアの開閉器のボタンを押す。

男性の手足首を拘束していたチューブが剥がれ、男性は前のめりになり冷たい床へと倒れる。

「がふっ！ 痛エ……ここは、どこだ」

「げへへへへ……ようこそいらっしやいましたね。ここはマスター

『END』が統括するギルド——タルタロス冥府の門。歓迎しますよ」

2

「……………つち、嫌な事を思い出しちゃった」

ビュオオオ……。吹雪く丘で、黒髪の鎧を着込んだ男性——シルバー・フルバスターは目を覚ました。

どうやら、墓参りをしながら座り込み寝ていた様だ。コキコキツと首の骨を鳴らし、一つ伸びをする。

「もう、三年か……………年を取ると時間が流れるのは早いもんだ」

立ち上がり。目の前の墓代わりの木板を見つめクスリと笑い、「まあ、死人の体だからこれから年取る事も出来ねえんだけどよお」まるで、目の前に愛する人がいるかの様にシルバーは微笑み、語りかける。

木板には二人の名前。一人は愛すべき妻——ミカ。そして二人の間に生まれた愛すべき息子——グレイの名前。

二人は死んだ——シルバー含め。ただ、姿かたちを取っているのはシルバーだけだ。

もし本当に神がいるのなら、シルバーは喉が裂け声が声じゃなくなるその時まで叫びたい。

なぜ、オレなんだ！

なぜ、オレだけなんだ——っっ！！

と。

「……………なっちまったモンは仕方が無えもんな。ハハツ、何の為に手に入れた力だよ」

こん畜生、舌を打つ。魔力を練り上げ右手を振るう。

ただそれだけの動作、それだけの行為により降り積もった雪原に身を隠していた一体のスノーウルフと呼ばれる魔物の体が、音も無く凍りついた。

「だけど、終わるワケにはいかなくなったんだよミカ……………オレ、死人として生き返ったけどさ。生きる目的見つけたんだ」

さつきまでの切ない感情は掻き消え、その顔には喜びの色が張り付いていた。

クスクスと笑う。

「報告が遅くなっちゃったんだけどさ。冥府タルタロスの門に入ったその日、出会ったんだよ。今、十歳の男の子なんだけどよ……異母——とか、そんなんじゃないけど。息子みたいなヤツがいるんだ」

チツセエ癖に妙に鋭かったり聡い所があるんだけど、コイツがまた面白い子供ガキでよお——。

シルバーは微笑む、あの悪夢の様な日々が続く様に思えたその時に降り注いだ希望コトモの事を思い出して。

「ハハッ、グレイのお兄ちゃんだな。喜べよ、オマエの兄貴だぞ？ めちやくちやなヤツだけど、オレが覚えた悪魔を殺す魔法——さながら滅悪魔法つつうのかな。教えれば教える度に覚えていって強くなっっていくんだ」

オレもいつかは抜かれちまうのはかな、義理だけど父親としてしっかりしなきゃなんねえよなあ。

墓標に笑い語りかける。その顔にはぬくもりがあった。

ハハハハッ、一頻り墓標に向かいギルドで見つけた希望の存在を話す。

「レイン・ドロップって言うんだよソイツ。今度連れて来てやるよ、オレには負けるが男前だぞ」

そんな話をもう何時間話しただろうか……いや、実際は数十分しか経ってはいない。それだけ、密度が濃い時間だった。

だから——、そろそろ戻らなくては。そう思い、墓標に背を向ける。

「——今度こそは守り抜いてやる。終わってもいい、けど……もう、オレの目の前で大切な人が亡くなっちゃうのは勘弁だからよ。グレイ、嫉妬すんなよ。オトコなんだ、我慢しろ」

小さく手を振る。

靴底を通して、雪の柔らかさを感じ取る。

「ミカ、見守つといてくれよ」

小さく呟いた言葉は、雪風に攫われる。

(何言ってるんだよ、ハハッ。声が聞こえるワケでも、見えるワケでもねえのにな)

そんな自分について自嘲気味に笑う。

その時だった。

フワリ——、背中を包み込む様な、抱かれた様な暖かさを感じたのは。

シルバーは振り返る、そこには——

『行ってらっしゃい……シルバー。がんばってね』

「——ああ、言われなくても足掻いて見せるさ。意地汚くしがみついてやる、何にだってな」